HQ
1104
J74+

May 5
1888
no. 108

廿一年五月五日發兌（版權所有）

THE WOMAN'S MAGAZINE.

女學雜誌

一冊五錢
府內無稅
郵稅一錢
毎土曜出版

東京女學雜誌社

第百八號

社説
理想之佳人（第五）
文明國民の理想
論説
日本婦人の洋裝（イーストレーキ夫人）〇家內經濟の大要（木村熊二）〇婦人矯風の手段（田村直臣）
批評
禁酒美談
叢話
戒指者（久松定弘）〇小供私巳の衛生（大澤謙二）〇百人一首一口話（鈴木弘恭）〇チッキ妹の送金を返す〇應擧の鷄
小説
小說神髓
佳傳
ルウテルの母
寄書
文苑〇歌三
小供の話
密こき仕立屋
新報
時事新報と日本女子〇女生徒の化粧ル外

專賣二〇三一一五　許和堂中川昇刻

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 108, MAY 5TH, 1888.

EDITORIAL:— The Ideal Belle: No. V. Bell-Ideal of the Civilized Nation.
LEADING ARTICLES.— Japanese Dress, by Mrs. Eastlake; Principles of Houshold Economy, by Rev. K. Kimura; Means of Social Reforms, by Rev. N. Tamura.
CRITICAL NOTES.— "Kin-Shu-Bi-Dan" A Temperance Story.
MISCELLANIES:— Finger Rings, by Dr. S. Hisamatsu; Children's Health, by Prof. K. Osawa.
A Child's Hygeian, by Prof. K. Osawa; Short Conversations on the Hundred Odes by a Hundred Poets: No. VI.; Dick and His Sister; Wokyo, an Old Japanese Painter.
NOVELS:— Bouquet of Novels.
BIOGRAPHIES:— Luther's Mother.
CHILDREN'S COLUMN:— A Wise Tailor.
CORRESPONDENCES.
GENERAL NEWS.

前號(第百七號)目次

●社說 理想之佳人(第四)似而非美人
●論說 家內經濟の大要(木村熊二)○婦人矯風の手段(田村直臣)
●叢話 子供私己の衞生(大澤謙二)○プライユー及木村長門守の妻の手紙○古今婦女の比較(鈴木弘恭)○下婢のつかひ方
●小說 都鳥
●佳傳 ナポレオンの母
●寄書 歌(佐々木信綱)
●小供の話 忠實なる家來
●宮廷錄事 皇后宮行啓○御息所の臨院
●新報 婦人勸業會社○修身職業英和女學校
其外

●珊瑚之珠 (第六十四回)

○シエクスピア曰く人間一生の行爲中其の惡き者反つて死後に殘り其善なるもの時として骨と共に埋る。

○エマソン曰く凡そ一家の粧飾は之に往來する所ろの朋友に過るものなし。

○ボルク曰く汝もし健康ならずして而して身躰安からば則ち道德なくして能く幸福なるを得べし。

○スウイフト曰く若し麥一穗を二穗にし草一葉を二葉にし彼の前日の收納を倍することを得たるものあらば其の人生に功あり國家に績ほしあること蓋しあらゆる政事家に優る。

○フランクリン曰く怠慢は万事を困難にし勤勉は万事を容易にす、朝たに晩く起る者は終日趨走して夜る漸く其の事務に追付く、蓋し遲怠は歩行の甚だ緩慢なる者なるが故に貧困は速に之に追迫まるなり。

○ロングフエロー曰く汝ちが門戶に賢こき古語を記るせ云く大胆なれ大胆なれ大胆なれど又云く然れど餘り大胆なる勿れと然れども玆に其足らざるよりは餘れるが宜し及ばざるよりは過たるが善し故に寧ろヘクトルと爲て戰塲に死すべしパリスと爲て逃るゝ勿れ。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第百八號
明治二十一年五月五日發兌

社說

○理想之佳人

（第五）。文明國民の理想、

其一、美人必ずしも佳人に非らず。

むかし太田錦城、幾年の世故に經歷して初めて悟る所ろあり、之を梧窓漫筆に記して云く、嫁を取るに、餘まり醜きは宜しからず、固より非常の美人を求めよとは云はず、只だ人並に優れて容姿の惡しきは容赦すべしと。眞に然り、吾人も亦た必ずしも、「いらつめ」を棄て、「不具都女」を取よとは云はず、彼の霍臺が醜婦に知られたる、安田義遠が板額を懸想したる如き、苟くも其思ひの一種特別に高尙なるものあるにあらずんば、固より亦た特別に不美人を愛せよとは云はず。然れども大凡そ、美人は即ち佳人なり佳人は即ち美人なりと覺悟するの習慣あらん限り、吾人は其の理想の倚ほ實に下賤なるを歎ぜずんばあらず、彼の窈窕たる美人、天を望めば飛ぶ雁も雲より落ち、淵に臨めば、圉々焉として泳ぐ所ろの魚も沈み、彼のさえ渡つたる明月も爲に閉ぢ、露に艱める海棠も亦た羞るに至つて、初めて之を佳人なりとせば、吾人は尤も之に不同意を表するものなり。嘗つて聞く、片田舍に住へるものは杜鵑を愛せずと、杜鵑の餘まり屢ば鳴き渡るゆへなり、彼の美人は眞に美しきものなり、然れど朝々暮々之が面を拜するときは、何人も遂には、特別に其の美を感ぜざるに至るを常とす、苟くも老を偕にし穴をも同うせんとする終生の同伴者に於ては、之を愛するの點、蓋し鼻筋にあらず、蓋し口元にあらず、又其の花顏、柳姿、にあらずして、一種の言ふ可らざる、深奥の趣あつて存するが故なり。之を以て、何如に美人を愛するものと雖ども、其の美人を愛するの愛は、皆な久しきに續かず、喩ば萬靑の秋に向ふが如く、遂には枯れずして止むものぞなき、則ち人は何日までも形躰の美を愛するものにあらざるの證なり。入道淨海、またゝくの間に妓王を棄てゝ、佛に歸依せり、論者之を評して、淨海を輕薄なりと云ふ、未だ盡さず、蓋し形躰の美を愛するものは、其末、何人も皆な斯の如きにあらざるなきを知るべし。左れば、所謂る美人なるものは、未だ大丈夫が其の全心を擧げて之を愛すべきの人にあらず、只だ少さかの間だ、以て其心を喜ばするの畫像に過ぎずと云ふべし。一笑吾が腦を蕩する

に足るか、吾人は再顧して之を忘るべし、一温言、吾が鐵腸を動かすに足るか、吾人亦た再顧して之を忘るべし、然れど彼の忘るべからざるは、眉目口鼻の後に一種の靈顔を現はし、優乎たる身躰に傍ふて一種の靈躰を示し、心志高潔、愛情濃密なる佳人にてある也。故に吾人は、美人を顧みずと雖ども、佳人に至ては之を慕はざるを得ず。佳人よ佳人よ、吾人は之を女性の英雄として、常に崇敬し置かざる者也。されば世の小説家諸君、君等其の理想佳人を畫くとき、千篇一律、皆な美人佳人を混同せざるはなし、希はくは少しく之に注意し、先づ此の兩人種の間に、判然たる谷の存するとを示せ。ジエーン、アイルの一小說、餘り美しからぬ佳人を以て立物と爲すは、眞に是れ非常の卓見にてある也。故に云く、文明國民が理想する佳人の第一資格として、先づ佳人必ずしも美なるを要せずと斷定すへし。

其二、　佳人は敬せらるゝ者なり。

次に尤も大切なるは、佳人に敬意を受るに足るの資格あると、是れなり。凡そ女にして此の神脳なきものは、思ふに、物言はざるの花、魂ひなきの美人像の如し、蓋し人に愛せらるゝともやあらん、左れど此の愛は、之を慰みにしての愛なり、之を好いての上の愛あり、未だ高尙なる眞愛なるものゝ、此の如くにして能く起らんとを知らざる也。彼の隱居が花よ手入れするを見よ、彼の少娘が人形を愛するを見よ、固より之を大切にし、之を保護して餘念なきなり、然れども、此れ未だ一點の敬意を存し得ざるの愛なるが故に、彼等は之に依て少さかも高尙に進むとなく、亦之に依て全心を鼓動するの愛を受けたるとなし、是れ豈に人世の尤も大なる不足にはあらずや。抑も人世に朋友ある、家族ある、父子兄弟ある、何れも皆な、人をしていよ〱豚より遠ざからしめ、いよ〱猿より離れしむるの大激導たり、特に共に手を結んで、此の困難多き世路を步行すべき、彼の妻と云ひ夫と云へるものゝ存すると、實に是れ、人をして尤も樂しみあらしめ、尤も高尙に至らしめ、尤も天國に近づかしむるの大妙工にてある也。左れば伉儷の相ひ交はるや、之が爲に高尙至潔の愛依て以て起り、之が爲に道德品性の有樣依て以て進み、世に夫妻あるが爲に、人間界日々に幸福と道德とに大進步なかるべからず。而して如此きの良結果を生ずるの源は、伉儷先づ相敬し相愛して、同等同和の愛を行ふにあり。而して更らに、如此き同等同和の愛を生ぜしむるの元因を何ぞと云はゞ、即ち先

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

づ、佳人に敬愛を受くるに足るの資格なくんばある可らざる也。左なきだに日本の男子は、威張ることを好み、壓制することを好み、女子を見て殆んど其の玩弄物の如くに輕蔑する、尤も惡むべきの習慣あるものなるが故に、玆に此の一點の注意は、特に其の尤も大切なるを信ぜり。彼の放蕩息子が、たわいもなく流連して、親親類の異見をも聞かざるに拘わらず、既に其の心の儘にして自由に放蕩流連したるの曉つきは、何人と雖ども忽焉之に厭を生じて、彼の人の勝手に成る所の人をば大に忌むものと聞ゆ、是れ敬意なき愛の久しきに續かざるが故也。之を以て、大凡そ其妻を敬せざるの男子は、少くとも、左の二件の不幸を見ざる可らず。曰く最上の愉快なき事、即ち是れ先方より高尚の愛を受ることを得ざるが故也、曰く品徳の進歩なき事、即ち是れ木偶玩弄物一般の人と同伴するが故也。されば、人もし伉儷上乘の幸徳を收め得んと欲せば、須らく先づ、夫妻相ひ敬するの甚だ大切なることを覺悟すべし。吾れ彼れの靈魂を敬し、彼れの才德を敬し、彼れの内助の高大なるを敬し、苟くも之を屈するの念なくして、只管すらに、彼の靈德の發達するを望み、即ち、彼れを吾と同等の人間と認め、吾に無かる可からざるの、同行者と認め、敬意謹愼にして、毫末も他を侵す所ろなく、而して其底に、斷つ可らず切るべからざるの優温たる愛情を存せば、人世の幸ひ果して何如んぞや。故に吾人は、先づ男子に向て君等婦女子を敬すべしと云ひ、婦女子に向ては君等必ずよく敬せらるべきの佳人たれと云ふべし。而して、佳人の能く敬せらるる者は、先づ之に、之を受るの資格なかるべからず、資格果して何如ん、即ち、立派なる佳人と爲ると是也。

其三、佳人の資格。

然らば、文明國の佳人に必要する所の本質は、抑も如何んの資格なりや。云く、是れ尤も言ひ難き所の者なり。然れども、吾人今敢て大膽に之を敍し去らんとせば。蓋し、其智力は、男子と異方の方角に向ふを可とす、即ち、之を敎育上に於て、經濟上に於て、愷樂幸福の上に於て考ふるに、凡そ男子が長ず可らず、女子が容易く發達し得べきの、方角に向つて大に進歩したるを可とすべし。又其感情は、男子に在り得まじき信切濃微の點に達し。其道德は、一見、男子を感化し、一言、大丈夫を愧死せしむるの高尚に達したるが如き、即ち是れ最上の佳人ならんと云ふべし。然れども、吾人は今ま、啻に如此き佳人を理想すると云はず、故に亦た滔々たる今の女

子に對して、其の至り得がたきの資格を無理に要むるとは思はず、蓋し古來幾多の佳人中には、即ち吾人が玆に叙するが如き最上佳人の現存したる例し、其の少なきにあらざるを知るなり。

其四、佳人の頭ま。

故に、廟堂に立つて百官を指揮したるの女皇、三韓を征して、外夷を降服せしめたるの皇后、もしくは、馬に乗り眉刀を揮つて、敵陣を蹴け廻りたるもの、若くは、劒を提げ、三軍に將とし、孤城を助けて國步を挽回したるもの、如きに對しては、吾人は、女子が斯の如くあり得がたしとも云はず、又斯の如くあるとの宜しからずとも思はず、たゞ〳〵斯の如き婦女子の、理想佳人にあらざるとを確言し得るのみなり。左れば、男子の智力もし、創設的に長ぜば、女子亦た補足的に長ずるに安んじ、彼もし外事に長ぜば、吾亦た內事に長ずるに安んじ、彼れもし兵馬に長ぜば、吾亦た文事に長ずるに安んじ、彼若し政治に長ぜば、吾亦た教育に長ずるに安んじ、彼もし工業に長ぜば、吾亦た慈善に長ずるに安んじ、必ずしも男子の如くなり得べしと猜發して、無理に其の心身を勞し、特更に其の固有の長所を棄てゝ、徒らに負け惜しみの競爭に奔走するは、吾人が謂ふ所の、佳人の智性あるものに、あらざるなり。

其五、佳人の心。

而して、感情の濃微なるは、迚も男子の及ぶ所にあらざるが故に、吾人は理想佳人に於て、此の感情の、尤も大に發達したるをば切望せり。抑も女の情の剛きは、天の使が赤子を鞭撻するの心地せらる。本來彼れが最と信切なる眞心は、男子の想像の及バぬ程なり、然るに此の信切なるの温情を氷らせて、特更に冷々たる寒鵰と爲らんとするは、果して何事ぞや。佳人よ、願くは温かなれ、信切なれ、優さしくあれ、敢て其の固有の感情を殺ぎ玉ふこと勿れ。男子の爲めには、願はくは、千軍萬馬相ひ奔闘し畢り、戰ひ止んで、月高く登るの夜、則ち陣後に洋々として進軍曲を奏する、彼の樂隊の如く爲れ。願くは、吾れカトーの娘たり、ブルータスの妻たり、郎若し國事に死せば、妾亦た國事に死すべし、女子若し長舌を禁じがたくんば、妾亦た斷腕の苦を忍び得まじと云へる、彼の羅馬の愛國者の妻の如く爲れ。斯くて、疲れたる兵士を鼓舞するのラッパと爲り、暴れに荒るゝ勇將を和らぐる、背上の梅一枝と爲り、大軍功あつて報なきの人を慰さむる

、漢の大樹と爲り、之を鼓舞し、之れを和らげ、之を慰さめ、又之を勵まし、之を察し、人には告げ得ざるの思ひを忖度して、即ち之を測り、之を組分けて之が苦勞を分かち、軟手を以て慷慨を撫で、涙を以て悲歎を消す、一に是れ、彼の佳人の感情に於て、尤も爲し易く、亦た爲さずしては決して安んぜざる所ろの者たり。

其六、佳人の勇氣。

左ればとて、佳人の涙もろきは善し、其のなよ〱としたるも善し、但だ其の甚はだ弱きは、決して之に有るまじきものなり。固より戰塲に打て出るが、佳人の勇にてはあらず、砲烟彈雨の中に自若たるが、亦必しも、佳人の勇にてはあらず。吾人は、自から編める物の具を良人に呈し、涙を飮んで、莞爾として一笑し、郎請ふ花々しく戰ひ玉へ、と云へる、彼の波斯の勇將の妻を以て、更らに其の勇將に劣る所なしと思へり。汝ち、其の劔を短かしと云ふか、須らく一步を進めて、劔を長くすべし、汝ち其の盾を強しと云ふか、須らく之を提げて歸れ、然ずんば之に乘て歸れ、と云へる、彼のスパルタの母を以て、更らに其偉男兒に劣る所なしと思へり。佳人の勇、希はくは如此くなれ。抑も戰塲にて打死し、陣頭馬前にて倒るゝと、青史に照々として古今の賞賛する所ろたり、然れど必ずしも、世の勇者は此に限れりと思ふ勿れ。彼の戸々のホームに、幾多の勇者なからんや、彼の不思議がる所の子供を慰めて、笑つて、良人の鎧の紐を結び、深夜孤燈の下、寤寐に劍擊銃砲の音を聽くもの、何れか亦た勇士にあらざらん。左れば、彼の佳人は、其信切なる情に、剛強なる勇氣を含み、鍛鐵千斤、之を包むに綿を以てし、所謂る威あつて且つやさしきの德あるものなり。

其七、佳人の道念。

而して、吾人が彼の佳人に於て、尤も歎美する所のものは、其の上帝を信ずる信仰の確固たる、其の眞理正義を慕ふ道念の高潔なる、其の博愛にして仁に富み、其の慈善にして犧牲せらるゝを好む、其の道德の、尤も及び難きにある也。彼の淫われたる婦人は、男子を地獄に陷しいるゝの惡魔よりも恐ろしゝ、然れど彼の高尙なる佳人は、男子を高くし淸くし、之を天國に導く所の天の使ひよりも聖よし。ルーテル云く、信仰に厚き婦人ほどよ聖淸なるものはあらずと、吾人亦た固く之を信ず。風姿楚々、而貌溫々、而して其の優しき眼の中、その溫和き口の邊りに、凜として心胸を服するに足るの威嚴

を存するものは、即ハち、如此き高尙なる佳人の面にてあるべし。彼の、日夜營々として利に走るの人、市に野に、權謀術數を盡して相ひ戰ふの人、若し如此きの佳人を一見せば、其魂ひすでに洗ハるゝが如きを覺ゆ、況んやこれに交わり、之に伴ひ、之と居を同じふするに於ておや。嗚呼佳人ある哉佳人なる哉、彼等は人生を天國に合する、最と軟かなる手の案內者なり。見るべし、世は是れ時として、羅馬當世の圓劇場たらんとす。而して男子は、即はち獅子となり、犀となり、豹と爲り、虎となりて、怒號叫哮して大に相ひ爭そひ易ものなり、然れども佳人は、此間に立つて天を望み、讃美を唱し、靜々粛々として、衣を掻き合せて死を決するの基督信徒たらんとす。嗚呼、佳人なかつせば、世は是れ道德の暗黑世界なる哉。

其八、佳人乍ちにして來る。

蓋し文明世界に於て、文明國民が理想する所ろの佳人なるものは、大率ね斯の如きものか。果して然らば、吾人女學雜誌の記者は、假りに姉妹に代つて、謹んで日本國の男子諸君に告ぐ。抑も諸君の先祖は、吾々を壓制し、吾々を束縛し、吾吾を妾となし、婢となし、玩弄物と爲し、其の勝手氣儘に待遇したまへるが如く、傳せり。抑も是れ、吾々女性の躰力弱く、智力薄く、德性の足ざりしが故に因る、元と優勝劣敗の自然法に出でゝ、敢て今ま之を怨むる所あし。然れど、彼の先祖諸君は、啻み女性の身躰を束縛壓制せられたるのみにあらず、併せて其の心志意想をも自由にせられたり。思ふに是れ諸君は、女性が只だ肉躰に於てこれに服するのみならず、併せて、其の心に於て之れに隨がひ參らするを好みたまひしが故なり。左れば、彼の諸君の理想は、女性が之に隨ひ、之が自由と爲り、之が勝手にせらるゝに在りき。而して女性果して其の如くなれり、試みに今の日本の婦女子を見玉へ、滔滔として、皆な此の有樣に存せざるものは稀れなり。先祖以來の理想其通りに行ハれて、諸君の本願最早や成就したりや、圖らざりき、文明の風一掃して、文明國民が佳人に於けるの理想、決して斯の如きにあらずとは知られぬ。好し左なきだに、斯の如の佳人は、諸君に最上の幸福を與へ、諸君を高尙の地に導き得るの婦人にあらず。左らば則ち、今日、此の今日は、諸君が、先祖傳來の理想を放擲して、更らに開化したる一新の理想を立てらるべきの時にあらずや。諸君乞ふ聞し召せ、昔し天孫海神を禱り玉へば、乙姫忽焉として出現し

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ましまし、葉公龍を好めば、龍も亦た天井より顔を出せり、諸君もし眞に極美の佳人を理想せば、極美の佳人、豈に天の一方より降生することなからんや。

論說

○日本國洋裝の婦人　イーストレーキ夫人

左の一篇は米國サンフランシスコ在留のイーストレーキ夫人(元東京獨立新聞記者東湖氏の母)より寄贈せられたる論文を譯述したるもの也。

日本國の婦人方が洋服を召し洋裝を爲さるゝことに付ては當今何處に參りても亦た上流社會の何人に承はりても皆な一般に之を歎息致し居れり。思ふに是は彼の趣きある立派なる且つ品やかなる所ろの衣服を棄て八釜しき業々しき不健康なる所ろの衣服に變ゆるものにて候半。只今にても凡そ西洋の賢しき人々の中には彼のシメ物張つめ物の如き化粧品を用ふる事若くは腹を嚴しく縛ばり腰を強く下に壓附くる如き所行を太たく歎き居候にも拘はらず尙ほ胸より上を大層に壓してたゞ其の外見のよろしき迄でに之を平たくするもあり又た非常に重やかなる下服を腰に持たせて常ならぬ苦しみを致すもあり是も亦た同樣に悲しむべきことと考へられ候。然るに日本の服は物躰其の重みを肩に持たするの趣向ある上に身躰の中ち尤も温かにせでは相成るまじき邊りに丁度大きなる帶を纏ひ而も其の纏ひ方によりて乳房を上の方へ壓し上げ候事及び腋の下に相應の間隙ありて空氣の流通宜しければ腕も之が爲めに斷へず新鮮の氣に觸れ身躰より發したる濕氣も亦た自由に外に出で去る等既に莫大の功能に候にこそ又彼の縮緬の如き品柄よき織物にて裁したる衣服を裝ふときは手足の天然の外形も現はに知らるゝの趣きくれぐれも洋服よりは更に賢こく更に美術に適ひ尙ほ又更に愉快にてあるべしと存じ候。とは申せ彼の靴を穿ち靴下をハキたまふとは是れ即ち宜しき方への改良進歩かと思はる蓋は彼の足を外氣に曝らして之を冷やかに致すより往々感冒もしくは氣管支的のさまざまの病氣に罹り易きものなれども若し右樣に靴下と靴とを用ひらるゝことならば此の患ひは消滅いたし申すべき歟。尤も此處に注意すべきは彼の家の內にて用ゆる靴はカヽトの無きものにてあるべし但だ其のカヽトあるは戶外にて穿つもののみに限り而も其目的はたゞ路上の濕氣を防ぐとのみに出づると肝要に候故に其の風は彼の英吉利風と申すが宜し佛蘭西風と申して靴裏

の殆んど半ば邊りに附けたるは尤も宜しからずと思はる。扨て左に抄出いたし候は全世界中最良の雛形なりと申す彼の希臘の像によりて凡そ完全なる美人の形躰とは抑も何如ようのものなりやと云へるを取調べたるものにて即はち日本國の貴婦人方に右の完全なる雛形を示すの効能あるものと存じ候なり。

(未完)

○家内經濟の大要(其二)

木村熊二

西洋と吾が邦の風俗習慣各異なる所あれば彼に便なる事は我に不便を感ずる事多し然るに家内經濟を說くもの往々西洋の風俗習慣に心醉して家屋の經營より衣服飲食室内の裝置も擧て彼の邦の風を學ばざる可からずといへり邦人は西洋風の家屋に安ずべきものにあらず又衣服も男女常に西洋服を被るは隨分究屈にして會計上に困難を生ずる事を覺へたり殊に食物は如何に健康あればとて洋食のみを爲し得べきにあらざれば我が邦にては其風俗習慣に適切なる家内經濟を講究してこそ各其の便利を感ずべけれ傳家の衣鉢を破棄して新に三層の煉瓦屋を營み室内には絨氈を布き琥珀を以て裝飾したる椅子を置き卓子には佛蘭西様の机掛を掩ひ寢室には彈機の臥臺を具へ食には神戸の牛肉西洋の野菜と獨逸のビール佛蘭西のシャンパンあり銀鈴の音未だやまず侍婢は趨走し來るこれぞも功名の竹帛に垂れて三萬圓の公債は子を孕み子又子を生んで孫彦玄孫と榮へ行く孟子が我志を得るも爲さゞるなりと其の實淡しろうに言たる縉紳家の生涯にして中以上の家族にては決して爲し得可きにはあらざる也尋常一樣の家にては一室は西洋風なれども他の室は全く日本造にて御定の雜作あり衣服も良人は洋服を着するもあれど細君は和服にて椅子に寄るを好まず俵に跨りて蒲團上に愉快を占むる大黒天の不都合はなけれど矢張例福の如く膝の半ば天鵞絨の蒲團に沒し火鉢の側らにて長き氣世留千系萬縷の烟をくゆらし胸裏に聚る「どうしよう蚊こうしよう蚊」を逐ひ除けんとす食膳方丈ならねども東海寺の和尚の發明に係る香の物と皺はよりても色赤き梅干に、色を喰ますといふ生姜をそへ岡部八文食せざれば其味を知ずといふ珍味もあり斯る社會に西洋風の家内經濟を用ひよといふは又深く思はざるの說ならん又下等社會にては夫婦共に勞動して生活を營む者なれば多少西洋風の世渡を爲る者なり良人は朝まだきに家を出て睡れる花を其まゝに霞の床に殘おきて山の端へ急ぐ月影をたどりつゝ自己職工場へ急ぎ行き妻は又暫時ろの夜工に心も細き燈火を挑て丁子頭も實を結ぶ客

はなしの花ならで麻を編み衣を綴りて家計の一部分を補助せんことを務めたり家計のことゞもは全く良人の手に依賴するにあらず左れば又一種の家內經濟法其の中に存するあり夫は今こゝに喋々せざるなり我か必要と感ずる所は中等社會に適するものなり

今や家內經濟を說くもの家屋の搆へに付て空氣の流通を說き出し其分析法までを示して人をして一日半時も日本風の家屋に起居坐臥するに堪ざらしむるの感覺を生ぜしめたり日本風の家屋も注意の仕方によりて隆冬盛夏といへども甚だ快樂を覺へしむるものなれば敢て之に非常なる金錢を費して改良するを要せざるなり外國人の日本家に住居せる者常に予に語り云雨戶の溝に玻璃障子をたてゝ外部の寒冷なる空氣を遮り室內に小さき油爐を置けば背を茅檐の冬日に曝さず共其の溫きと烘が如し一鉢の梅蕾は春まち顏に咲きそめて淸香は空氣に浮動せり羅浮の春も一室の中にある心地せりと又夏日には葡萄を高く架して日光を遮り巨大なる鉢に水を充しめ金鱗をして其の中に遊泳せしめば淸涼なる空氣自然浸入して氷雪窟に在るの想を爲りと勿論家屋は建築法宜きを得ると得ざるによりて冗費に非常の差を生ずるものなればこゝに中等の家族に適する住居にして且つ便利と冗費を省畧し得べき家屋の雛形を示さんとす

空氣の流通をよくせんには各地異る所あれど東京の如きは常に南北の風多ければ窓を開き椽側を置くに必ず直に其の方角に面せずとも可成丈其を選むへし然し北方は椽側を短かくして常に玻璃障子を閉づべし南方の椽側といへども余り長きに過べからず椽側の長は之を拭に時間を消すのみならず數枚の玻璃障子を要せざるを得ず又之を用ざれば五月雨の頃四椽の琴筑聲甚かしましく連日朦朧として室內に濕氣充滿し杰を燃し不快なる感を生ぜしむへし西洋風の室は一間あるも大に便利よきものあり夫は來賓をして沓にて入り小さき椅子に倚を得せしむべければなり寢室は臥床を搖動し洒掃に便あらしめんが爲に疊を用ず板の間敷に爲し置べし窓を西北に開けば寢れぬまゝに八聲の鷄を待わびてしのゝめ近き頃眠に就く老の身などに殊に宜き室なり又書齋は南と西を開ば短き三冬の頃にても日は永く室內甚溫和にして常に家に在て硯の海にあさりつゝ攄き世渡する記者文の林に分入り鳥の跡を守て樂とする博士などには甚都合よき室あり西の部分は碧梧靑楓を植へ或は葡萄を架て夏日燃が如き夕陽を遮屏すへし坐室は南北

に面して家屋の中央に在るへし庖厨は水にて濕ひ易く不潔を生し易き場所なれは東方に面して朝日に各所を乾かさしめ清潔に爲し置くべき便利を考ふへし如此建築する家屋は常に空氣の流通をよくして身躰の健全に適すへし　（未完）

○婦人矯風の手段（其二）　田村直臣述

又或る人が申しますに女は教育よりも徳が無ければならん女は心の力を以て事を爲しイクラ新聞記者杯にあらうとしても夫れは女の區域外の事である併し學問はするもの丶全く學問の力で社會の位地を取るは違ッて居る世の中を治むるに女と云ふ者は實に色々の事がありまして貧乏人を助け或は病院を建て丶孤を救ひ跛とか或は啞とか云ふ様な者を拾ひ擧げるは女に於て非常な働きである故に其夫の間に於ても學問の力に於ても亦た一國社會に立て事をする女は愛の力を養ふのは何から起るかと云ふに何しても基督に在る所の眞正の愛と云ふ者を充分に得られないならば出來ません是れは宗教の信徒たる女に取つて最も必要である譬へば車の走るには二つの輪がなければならん又鳥も一つの羽では青空に登る事は出來ません二つの羽で空氣を溺て始めて其働きを爲します然らば女も智力計りでは女の位地を高くする事は出來ません宗教の熱と宗教の智を以て高め又道徳の上で女の位地を高めると云ふのは何う云ふ工合に仕組を拵へ位地を定める樣な事にすれば宜いかと云ふに成程人は知識も有り道徳もあるけれども何う云ふ工合に何う云ふ働きを設けて遣るかと云ふに資本金を千圓入れるなら其割の廻りが三割に廻るとか其金と云ふ者は外の利子より多くなり五割にも六割にもなる男の知慧に據り商賣人の働きに據つて其人の働きの工合から矯風の働きをば東京市中に盛んにする事が出來る。

亞米利加は共和國で大統領を投票で撰び其時には色々の器械が入る例へば亞米利加は御存じの通り三十七州ある國で州は大きな分ちで日本で云へば先づ郡が有つて其次には村が有り其次には學校の區域で分れて居り又其下には一軒／＼の家が散り／＼バラ／＼に分ッて居る其樣に區域が有ッて唯だ茫然と國を見當てに遣らん一軒の家族の上にも區域があり其次に限る所は村、其次に郡、郡から州、其州が集ッて大きな亞米利加となります夫れであるから小さなものが段々寄つて働きを爲すので是れは如何にも稀代な事で人間が考への出來ぬ樣な處で大いなる働きを爲す事であります。

夫れであるから先づ矯風も一家の改良を爲し其學校の區域を

計り夫れから其村の改良を爲し其後には郡、郡の後には必す州の改良である又亞米利加の例を擧ぐれば多數の人が寄り集つて事を決し若しも玆に百人の人が有り此の百人の内には此の村には酒を賣つてはならんと云ふ者があり又其他の人は酒を賣れと云ふ時分には其百人の總躰が投票を爲し之れを開くに酒を賣つてはあらんと云ふ者が八十人で酒を賣つて宜いと云ふ者が二十人なれば酒を賣るとを禁ずる事になります故に旅をする時分には或る處には酒飮が蹈踉て居る村があり又其土地から八里か十里も行くと其村では藥種屋でなければ酒を賣りません何故そうかと云ふに噫是れ明かな證據で前の一つの村では八十人迄は酒を禁ずるが宜いと云ひ後の村では百人迄の多數が酒を飮んで宜いと云ふ事になり遂に酒を飮まんければあらん事になつたのでありまず斯くの如く多數に依つて禁する事になりますから又た片方から酒を飮んで害が有る故飮んではならんと云ふ事を其土地へ行つてドン／＼演說を爲し之れに賛成者が多ければ毎年一度宛役人を撰んで投票をしますから其投票の高に依つて又禁する事になります此の樣に段々小さな處から勢力を及ぼし小さな處から改良する故に今日矯風會に就ても第一に私共が眼を附けんければならん事は或は夫婦の間が最も必要でありますそうして貴女方が春木町に住んで居り段々敎育が進んで遂に春木町の近所に或は女郎屋が有ッてはならん酒屋が有ッてはならん或は猥褻な書物が有つてはならんと云ふ事を規則に致します或は東京でも北部の人々は之れに一致して此の中に在る女の方も斯くの如く區域を定め町を改良する事は女の義務である又其北部が殘らず改良が出來れば又東京一般に及ぼし夫れより外の國に迄盛んに及ぼし水戶福島其他新潟とか方々の國の女の人が連絡を通じなければなりません故に今日は唯だ女の人々が矯風する女の位地を高すると云ふのが敎育宗敎此の二つ有る計りであく色々の機關手立てを爲してする道があると云ふ事に就て唯だ僅かに其感じた丈けを述べました。」(完)

昔し箱根の關門に制札を出して「此門を通行するものは何れも其行先を有躰に申すべし若し欺くものは縛り首にすべし」と書いて、門の傍らに〆首臺を用意して置いた、日々の旅人は皆な之を恐れて悉く正直に其行先を申し來つたが、或日一人の老ぼれたるヨロ／＼としたる老人が門番の問に應じて、私は其の〆首臺にて殺されに參りましたと云ふた。之は正直なる答へで決して欺きでない、欺きでなくば之を殺すとも出來ぬが、左りとて老人の行く處ろは其の殺さるゝ場所であると云ふた、門番之をお上に伺出して何如に取計ふべきやと聞いた相で、(其指令は次號)

批評

(69.) 齊家秘訣禁酒美談　中本一册(五十五頁)定價十五錢　發兌所東京三十間堀江林書店

此書は粟屋關一氏が譯述ありたるものにして汝の子に衣服を與へよヨり幼時の嗜好は急に廢し難しに至るマデ凡そ二十八篇悉く皆な有益、清潔、實際の例證にして禁酒論の爲めには何れも勢力ある金玉の文辭なり今ま茲に其の中の短篇二つを拔き左に揭げて全卷の性質を示す、

我何ぞ酒を醸るを學ばん

小學校にては子供に度量衡の數を教へ、子供をして物を計るの法を知らしむ事なるが、一日、ある小學校にて教師、生徒にむかひ、酒は如何にして之を醸るやと尋ねたり。中にジヨンといふものありて、日頃は何事によらず教師より問はるゝことある時は逸早く之れに答へけるに此日は如何にしけん曾て之を聞かざるが如く答へんともせず、亦た考ふる風も無かりけり。教師すなはちジヨンに問ふて曰く、「酒を醸るの法いかん、汝之を知るや」。ジヨン曰く「かゝる事は之を知らずして可なり」。教師急に問ふて曰く、「そは何故ぞ」。ジヨン謹しんで答へて曰く「小生が父も小生も酒を賣り、或はこれを買ひ、或はこれを飲まんとも欲せざれば、我等にはこれを醸るを學ぶべきの要なければ斯くは申せしなり」。教師これを聞きて默然たり。

貧民學校に禁酒家の子なし

去る頃に諸家の義捐にて成立たる貧民學校ありて數百の生徒を養ひけるが、或年毎年開校の祝日に先頃死去したるロード、パルマーストンもこれに臨みたり。其時一個の紳士たちて學校の幹事に向ひ「我が パルマーストン 公のために質問いたしたきこと二條あり、足下これを許したまふべきや」と尋ねしに其許しを得たれば件の紳士は乃はち問ふて曰く、「この貧民學校は業を開きてより茲に幾年に及べるや。」幹事答へて曰く、「九年なり、而して生徒の卒業せるもの數百人ありたり。」紳士重ねて問ふて曰く、「然らば今一つ尋ねたきことあり。禁酒家の子にして此校に教育されたるもの幾何ありや。」幹事答へて曰く、「一人もこれ無し、禁酒家の子にして之れなきは實に小生の悦ぶ所なり。」

叢話

○戒指考　久松定弘

左の一篇は久松子爵の物せられしものなるが本邦人に取つては誠に耳新らしく而かも女流須知の事柄と信ずるを以も請ふてこゝに揭げぬ

歐羅巴の國俗寺院にて結婚の式を行ときは男女必ず戒指を取かはし又其交換したる戒指は古來必す左手の第四指即ち無名指にはむる者とせり是れ無名指は他の指よりも肝要なるがため然るやといへば然にもあらず然るに獨り此指にかぎれりとなすは抑如何なる理由あるや」とは古より歐羅巴人の疑ふ所にして近來我國にても此事に疑團を懷ものなきにあらず。無名指に戒指をはむる慣例の濫觴につきては古來の傳說區々にして孰を是なりとも定めがたし或は曰く無名指には心臓に連なる動脉あり是がために戒指をはむるなりと又曰く左手は右手に較れば物をつかむなどの働すくなし故にその指に戒指をはむればこれを損ずるの患なし是れ左指にはむる所以なりと此說は中古もつぱら俗間に流行たるものにして前說に較れば稍意味あるやうには見ゆれども亦信憑がたき說なり。又男女戒指をとりかはすは何故なるやと云ふに或說に戒指は

環状をなして端なく最目出度ものなればこれを交換するハ夫婦の愛情の始終かはらざることと環の端なきが如くなるを表するためなりと此說は愛情をもて婚姻の一要件とする基督教の訓義にはよく適ふものなるべしといへども歐州古來の風俗沿革より考ふれば一の附會說たるを免れざるがごとし。

抑婚姻契約の際戒指をとりかはす慣例の由來は甚久きことにて既に路踢氏の時代にも婚姻契約の式にハかならず戒指を交換するを例とせりしかれども其起原ハ迥に基督教傳播の前にありといふカツダサス氏のSakuntala名書によれば此慣例ハ既に古昔の猶太に行れたりしとされども基督教傳播前にありてハ新郎新婦と戒指を交換し又ハ新郎より新婦に戒指を贈物となせしハ唯惡魔をよくる禁厭となせしに過ずと云ふ一說に戒指を交換するハ末代のことにて上古ハたゞ新郎より新婦に贈與するのみにして其これを贈るは將來新婦は新郎に仕へて從順なるべしとのしるしなりと又一說にハ戒指をおくるハ契約の整たるをしめし且環の端なきが如く夫婦契約の永世渝らざるを表するためなりともいへり。

是等の說ハ孰れも一理なきにあらざれとも皆採に足らず但契約のしるしとなすの一說ハ羅馬人の習俗に基きたるものにて根據なきにあらず古昔羅馬にてハ契約をなすとき戒指を交換すればかならず契約の義務を履行すべきものとせり但婚姻契約の式にハ通例鐵の戒指を用ひたりこれを羅馬語にてPronubumと稱せり史家「テルツレリアン氏」の說には羅馬にても末代にハ黃金の戒指をもちひ間々これに文字を彫たることあり例へば汝の長壽を祈る。汝の福利を祈る等の句是なり又た寳石を欲これに手をもて耳朶を牽くの形容を彫刻しその上邊に「我ヲ忘ル丶ナカレ」等の語を彫たるものありしと云ふ」又或書に古の羅馬にて婚姻契約の際新郎より新婦に贈る戒指ハ鐵鐵にてつくりこれに小鍵をつけたりと此事甚奇異なりといへども亦强ち痴談ともいひがたし羅馬の史家「フ★ーチウス」の所錄に「テオゼピウス」なる者ありその妻に向て曰く予ハ嘗て卿に贈るに婚姻契約の戒指を以てせり今又卿にわたふるに謹愼用意の戒指を以てす卿よろしく此戒指をはめて謹愼用意家事の料理に從ふべし」とあり。

今つら〳〵此語の主意を考ふるに其語氣甚秘密にして幻術家の咒文に似たるところあり今日より之を見れは全く解すべからさる點おきにあらざれども羅馬人が戒指の贈與をもて契約完結のしるしと見倣したるハ敵ふべからざるの事實なり。

古來歐羅巴北部の口碑に存せる傳說と古書の所載とに據れば基督教傳播前に「スカンヂナウヰール」人ハ戒指を以て許嫁及結婚の式に欠くべからざるものとなせり然れども其國の風習として戒指の交換ハたゞ記念のためのみになすものとせり。

又同國に傳はれる一說に昔「ヒルマル」といへる公子あり出陣のとき「インゲボルク」とよべる結髮の婦人公子に云へる樣妾ハ「ヴアラ」(神名)に誓て此戒指を君に呈す這回の戰たとひ敵軍勝を獲るとも妾ハ君が婦なり誓て他の男子に見ゆるとあらじ」と。

「アイスランド」國にてハ爭論の和解契約の締結等を表するにハ皆戒指の贈與を以てせりとぞ通例其戒指ハ獸骨寶石又ハ金銀もて作れりされど其形ハ大にして腕にはむるも餘ある程のもの間々之ありと云ふ。

又婚姻契約の式にハ新郎たるもの腕に戒指をはめて掌に一箇の皿を持ち新婦とたがひに手を握るを例とす又是等の品ハこれを祭壇のうへに置き其傍にて式を行ふこともこれありといふ。

「アンゲルサクセン」人ハ婚姻契約の式を行ふに際し新郎新婦の傍に他人を立たしめ其掌を開きて新郎と新婦の贈物を受けしむるを例とせり而して新郎の贈物のうちにハかならず戒指を用ふるを定例とす此戒指ハ僧侶(寺院にて式を行ふときは僧侶の立會を要す故に玆にも僧侶の儀式に與る事あるなり)先これを受けて祈禱をなし後これを新婦の右手の指にさし結婚の節まで其まゝになしをき結婚の時に至りて新郎ハふたゝびこれを扱取り僧侶をして祈禱をなさしめ更にこれを新婦の左手の無名指にさゝしむと云。(未完)

○小供私己の衛生　(其二)

大學教授　大澤謙二述
佃　與二郎筆記

い、い、い、い、い、母親の乳のなき時又ありても遺傳病傳染病貧血萎黃病癲癇ヒステリー腺病結核梅毒等ありて乳を飲ませがたき時ハ如何にすれば宜しいかと云ふに乳母です乳母を雇はなければならぬ乳母の雇方に就てハ已にお話しがありましたらうが序でゞすから一寸お話しますがなか〳〵氣を注けなければならぬ者で先づからだが丈夫で自分は勿論親類にも傳染病遺傳病が有てハならん乳房ハ太くして膨れあがつてイヽ加減に青筋が見へると云ふ樣なのがよろしい餘り大き過ぎてもならず小さ過ぎてもならず傷があつてもならん押へれバ乳が走り出ると云ふ樣なのでなければならん夫れからして乳母に兒がある時ハ其兒を見るのが肝要で男か女か幾日位たちしか其割合に肥大て居るか瘠せて居るかを見る若し其子の死した爲めに乳母に出たと云ハゞ其兒ハ如何にして死せしかをも探究せざるべから

ず次に乳母の年は十八から三十二歳位までと云ひ升詰り二十歳から三十歳まで位ハ最も丈夫で乳も澤山あるからの事なりそれから何時頃子を生んだ乳母が宜しいかと云ふに雇ふ人より少し先に生みしが宜しい四週間から五週六週間位のがイヽです餘り早き乳母を取れば乳母の子に對しても氣の毒なり又乳母も産後直ぐなれバ病氣に罹らないとも云ベない夫れから乳がイヽか惡るいか是れは普通の人には見分けがたいです濃い薄い位のことハ分りますが理學的や化學的の性質又顯微鏡上のことなどハ普通の人には分りませんならうとなら醫師に撿査して貰ふのが宜しい若し田舍抔にて左る人も無いと云ふとあら仕方がないが自分の見込だけで宜しい其外乳母の氣質は穩和で深切でなければならぬと云ふこともあるが乳母に出る者抔ハ固より身元の善き所から出るのでもないから餘り八釜しく云ふ譯には徃かんです故に言ふことを用ゐざる棄ッ放しの者だけハ避けなければならぬが然う八釜しく云ふにも及ばん又乳母も生母と同じく好き滋養物を與へなければならぬ然し雇ふ人の暮し方と從來の暮しとは違ひますから之を急に變化するのハ宜しくありません又一日傳のみを命じて外に出るとを禁ずるなどハ宜しくない御覽の通り乳母を雇ふも中〳〵面倒ですとハ云へ母親の乳の出ない時ハ乳母に限ります。

然しながら乳母がなきか又之を雇ふ資力が乏しいとか云ふなれバ外の方法を以て養はなければならぬ即ち人工の養ひ方ですこれにも種々ありますが第一ハ牛乳です牛の乳ハ何う云ふものがよいと云ふに極く新鮮のものでなければならぬ試驗紙と云て藥師屋などにある青色の紙切れを入れて見て赤くあるのは酸くなつたので惡るいです牛によつてハ搾り初めより酸いのがあるから注意しなければなりません又近來ハ水を入れると云ふ樣なことを毫しハ遣る樣ですソレに困るとハ受器の不潔なのです牛の乳ハ奇麗にしないと變り易いものですから乳を入るゝものゝ掃除が屆かんと直きにバタとかチースとかの香いがします器の底に舊い乳がコビツイて居ると云ふ樣なのハ決して飮ませてハなりません又新鮮にして交ぜ物抔ハなきも乳の類によりてハ良否があります是ハ普通の人には見ても分りませんから乳母の乳を撿査する樣に其道の人の撿査を經たる上に其乳店を定め乳の絞りたてに持て來いと云ふ位に致すが宜しう御座います。

牛の乳と人の乳とを較ぶれバ牛乳ハ濃過ぎますから之をうすめなければならん其比例を圖にしてお示し申しませう。

生兒	牛乳	水
一日ヨリ二日ノ間	一分	三分
四週ニ至ルマデ	一分	二分
五週ヨリ滿二ケ月頃迄	一分	一分
三ケ月目ヨリ以後	百分	七十五分
六ケ月以後	二分	一分

右の如くに次第に水を減らして九ケ月目位になれば其儘で飲ませても宜しい且つ牛乳には糖質が少ないから砂糖を少し加へます一度分に凡一匁ぐらゐ尚委しく申せば上記の混和物百七十五分に就て砂糖四分八厘の割合で加へます且又其儘でハ冷いから暖めねばならぬ攝氏の三十八度華氏なれば九十九度位にして與ゆるが宜しいです分量を定め時間を定むる等は渾て母親の乳と同樣です詰り入り用だけ飲めば小供は餘します餘ッても宜ろしいから其の時は壜を取てあとは捨てしまいます小兒の口をふいたり器を淨めるなどは前に述べたる通りです。

小兒が一回に飲む分量は凡そ左の通りであります。

初日	一回に付き	三匁三分
第二日	仝	六匁六分
第三日	仝	七匁五分
第四日	仝	十匁四分
第五日	仝	十三匁
第六日	仝	仝
第十日	仝	十七匁四分
第二十一日	仝	廿五匁八分
第四十日	仝	廿八匁二分
第六十日	仝	廿九匁六分
第九十日	仝	三十三匁八分
第百五十日	仝	三十九匁六分

時としては牛の乳を貯へて置かなければならぬとがありますそれには炭酸曹達とかサルチル酸とか色々の法もありませうが併し朝の内に煮立てゝ冷やかなる所に置くが一番宜しい。（未完）

〇百人一首一口話（其五）

鈴木弘恭　講
八木照二　錄

中納言家持

かさゝぎの渡せるはしにおく霜の白きを見れば夜ぞふけにける

此の歌は新古今集にのせたり、古へよりさまざまの說あれど、さほどむつかしくいふには及びません、禁中に宿直したる曉天に御階の邊りに置きわたしたる霜の白きを見て、

寒夜の實景をよまれたのであります○かさゝぎは鵲也。かさゝぎのわたせるはしとは。鵲がわたしたる橋といふ義にて。かの淮南子に烏鵲塡レ河成レ橋といふ意を取て。殿上に登る御階をいへる也。禁中を雲上といへば。雲の上へ渡せる階なるを以てかくいはれたのであるが。甚だ面白く巧みなる趣向であります○一首の意は。殿の御階に置霜の白いのを見れば夜が深けたとであるが。さてころ今夜は寒かりしか。と天清く氣爽かなる曉の景を述べたる也。因に申しますが。夜ぞふけにけるのふけといふ言は。加行下二段の言にて。物の積りてくるとであります。則ちふけといふもふかといふも同じことであるから。深しといふ字をかきてふけともよみます。川が深い。雪が深く降つたといふも。水や雪の積りたる上をいふので。人のふけたといふは年の積りしと也。夜の深たといふは初更よりだん〱と更の積りしと也。又たかと云ふもたけと云ふもふかふけと同じとなれど。是は下の瀧の音と云ふ歌の條にいふべし。梧格一段切れの歌也。夜ぞといふぞが指辭にて。ふけにけるといふにけるにて結べる格であります。」

余の頁僕は余なり此僕や常に能く余の欲する所を爲せり(ゴルドン將軍)

○チッキ氏妹の送金を返す

昔しスカットランドのターソウに世を忍びて專攻せる植物地質の學者ありけり其名をロバートヂッキと云ふ小學を終れる後ち自ら麪包を燒き毎日凡ろ七八時間は家業の爲に粉にまみれ晩方より山に沿ひ川を渡りて草木岩石を探り饑れば其の手製の麪包に岩角の泉水をうるほして食らひ世の有益なる實物數多を發見したり其性甚はだ廉直にして人の助けを受るを屑よしとせず嘗て病みて甚はだ貧しかりし時にすら其の愛妹より贈れる金を送り返して云ひける樣は

妹よ凡そ人に金を送り且つ之を養ふほど其人に害あるとはなかるべし其人若し自立するの躰力あらんか然れどもこれに依りて如此き力を失ひ全く無用の人となるべしと。

亦た氏は嘗て云へらく我は勞勉せずんば死せるが如き思地せりと又云ふ我は正直にして規則正しく勞勉するとの外は爲し得ず怠慢にてあらんとは何如にするも決して爲し能はず我は世上に所云る紳士なるものとならざらんとを自ら切望す紳士とは實に怠たるものとの別稱なるが如しと」左れば一生妻を娶らず半ばパン燒にして半ばは學者たり粉を製し煙にむせぶとき彼れ餘念なし網を捧げて虫を追ひノミを打つて石を穿つ

とき彼れ亦た餘念なし全生餘念なし而して其の功業はスカットランドの大石碑、スマイルス氏の傳集、及び植物地質の天然物のみ之を知れり。

諺に云く。母は其子を愛するを知、之を愛するが故に色々の物を與ふるを爲、左れど何を與ふべきか、尤多く其子の爲になるものが宜ろし、即ち金錢にあらず、美田にあらず彼を立派なる人間となすと也、志想純潔、意志確固、獨立不羈の人たるを得ば之最上の財産を遺傳したるにもの也。

小說

○都鳥　第四回　石橋忍月

右引つゞき相掲ぐべきの處ろ忍月義此頃病中にて筆を執りがたく止を得ず本號には相載せ不申候。

猶ほ遠からざる内に「新粧之佳人」著者須藤南翠子の新作小說御覽に入るべく預じめ風聽申置候。

○小說神髓

蘇格氏著ケチルチルス　(第十二回)

アラスコはパーチーの虛喝を空吹く風の如くに聞流し先生マア其樣に御怒りある可らずあの藥の事については何如考へても不思議で御座る一躰私の秘傳を心得彼の奇藥の消し方を存ずるはダンダ一人しかあく夫もホンノ盜み習らひに覺へたるものでありしが之は夙く押方付たれば死人が再び來る心配はなし夫故へ彼れが効なかつたは必らず侯の天運の仕合せで私の術の拙かりしにはあらずと信じ申す、といよ〳〵瞞然として自信し大言すればパーチー微笑みて左樣ならばモ一ッ賴みたきとあり先達の藥を命ちに關はらぬやう然し程好き病氣に爲し得るように盛るとは出來まじきや、夫は最と易きとに候、然らば明朝カムナプレスに行いて其を調合して貰ひたし若し後の壯健に差支へあい樣にして盛つて呉れゝば褒美莫大ならんが萬一にも當人の生命を損ずるようであらば其儘には許さぬ、然らば今夜は最早眠りて明朝早々に出發して呉れと命じ彼方に遣つて扨てマイク、マイクと召び出しぬ。

マイクは顏を眞赤にしよろ〳〵として千鳥足にて出で來るパーチー之を睨まへて叉た例の醉だくれか差當り大切の談しがあるから直樣マジメに成らねば容赦せぬぞ、マイク忽焉として元の如く成る、よし〳〵夫で好し用と云ふは明朝一人の老人を伴つてカムナプレスに行き其老人と計つて彼のラブサートを好きに扱ふべし万一途中にて老人が逃げんとすればピス

昔し應擧鷄を描き祇園の祠に獻じたるに人皆な其巧手なるを驚歎したり然るに蔬菜を賣る翁之を見て獨り語して曰く鷄の傍に草を描かざりしは尤も可なりと門生尾して行き其家を知る應擧翌日酒肴を携へ其家を訪ひ懇ろに教悔を乞ふ翁曰く吾れ書を知るものにあらずと雖ども嘗て鷄を餌養せしに羽色の四時に變ずるを記臆せり足下の描きたるは冬の羽色にして殊に精妙なりしかば其傍に草なきを歎賞したるなりと應擧覺へず伏して之を謝しぬ實に藝術に執心するものは此覺悟なかる可らず。

トルにて撃ち留めよ日夜用心して能く之を守り行くべし玆に手紙あり之はフホスターに渡せ用が滯りなく濟まば莫大の褒美を取らすべし若し仕損じたらば勘辨いたさぬ特に其間だは决して酒一滴も飮んでは成らぬ今夜は飮納めに十分に醉ふべしとて互ひに約して快飮せり。

話頭一轉してカムナブレスの彼の旅籠屋と爲る之は讀者も記臆すらんマイクが叔父の家にて此の物語り發端の時に記し置いたる所ろあり、マイクはアラスコと共に此家に着し時恰かも市日に當り門前人さわがしく往通ようを白眼にてにらみ乍らマイクは例の如く大醉せり、コレ人々此のマイクを何んと思ふ今では天下に飛ぶ鳥も落るレスター侯の御家來だぞ近う寄つてお辭義しろ〱、何如に老人之から先方へ行くは大儀で無いか寧そフホスターを此方に召ばうでは無いかと最と横柄に小僧を招き之に手紙を持たせて遣はしける。

此時彼方の一室に立籠もり密かに此方を見て一驚し乍ら當家の主人とヒソ〱物語るものあり、吾れ主人の聲をきくに主人曰く之は大層に結構なお品でトレッセリアン殿が御滯留の節は何たる事も致し申さゞりしに斯る重寳を戴きては眞に恐れ入ります彼の婦人の事に附ましては色々とせん策も致しましたが何分にも知れませぬトレッセリアン殿も差したる御係はりの無い御身分にあれば モウ一層放つてお置なされば宜しからうに、それは兎も角アナタ樣も其一件を委しうお聞なされたいとならば今まあれ〱彼處で申しますあのマイクの所ろへフホスターと云ふが參ります相で之は先方の番人でありますが夫が此方に居る中に向うに行つて十分に景况を探索なすつたら分りませう若しマイクに十分酒を飮ませたらば中々容易に動く奴ではありませんから此方でぐづ〱として居る中にアナタは心の儘に樣子をお探りなされませ、ト云はれて連りに首を傾むけ色々に考ふるもようなりしが遂に斷然として决心したる趣きに見へたるは身を小間物賣の姿にやつして先刻此處に到着したる彼のトレッセリアンの家來ウエーランドあり。

ウエーランドはアラスコを恐るゝと蛇蝎の如し必竟此處に來りたるも彼が塔の上より一寸つと首を出したるを見たる計りの恐れに由るとは申せ今まマイクと此處に同伴して何か色々とたくなむと必らずラブサート殿の身を危くせんとの計ごとにてあるべし我一身また危うしと雖ども此期に臨んでは最早退くべきにあらず心を决して其の計ごとの裏を掻き彼の老ぼ

れの惡策を破らん、ヨシ〳〵と既に斷決しては復た大勇士なり最早毫も恐るゝ所ろなくして主人の策を謝し其の敎へに隨つて密かに裏門より出で間道を通つて彼のラブサートの隱家へと趣きける。

佳傳

○マルチン、ルウテルの母

彼の宗敎改革者マルチン、ルウテルが母と聞ゆるはマルガレツト、リンデマンと申しハンス、ルウテルの妻にして最貧しき生れなり未だ嫁せざるの前は或浴場の婢なりしと云ふされど道德の念篤く淸潔にして神を畏るゝこと著しく他人に超れしとぞ父ルウテルも至つて貧しき抗夫なれば一家を養ふ頗る難きに尙劇しく勞力して其小女を學校に送り其敎育をば忽にせざりき殊に家庭の敎育は嚴格にして嘗てルウテルが或る果物を竊みしゆへとて血の出るまで打ち懲らせしことあり又少しく父の意に逆ふことをなせしと思ふ時は必ず家の隅に隱れ出で來らざりしと云ふ斯る敎育法は殘酷なる野蠻國に行はるゝ法にして文明の國々殊には基督敎國に行はるゝ法にあらねど四百年前社會の有樣は一般に斯くの如くなりしぞ悲しくも又是非なければルウテルの云へる如く「我が兩親は傷く我を取扱ひ玉ひしゆへ我は斯卑怯となりしと覺ふ何時ぞや我母は僅の事の爲めに我を鞭ち其劇しき血の流るゝ程なりきされど我兩親は斯ることをもて子を敎ふる好き法と思ひ玉ひ少しも我等に善惡の區別を敎へ何時如何にして罰せらるゝやを知らしめ玉はざりし……」と恨みしも理なり然れどこれ當時一般の有樣と思へば强ち尤むべからざるのみならず若し其時我等をして其社會に立たしめルウテルが家庭の敎育を目擊せしめば必ず其母は善良なる基督信者にして最も深く子女の敎育よ力を盡せし人なるを知るべしと思ふ殊に父の催にて識あり學ある人を請じて度々集會を開き聖書の事抔を論議せし事深くルウテルが腦中に浸染し且つ父母が篤き信仰は一層の力を加へて將來のルウテルが幾分の形を養ひたりと云ふ。

因に云。マルチンルウテルと申すは御承知の如く「人は信仰に依て義とせらる」と云基督敎の一大綱領を基とし當時羅馬法王の敎會政治に反對し「設如惡魔の數は市街の屋根の瓦の如くなるも吾れ行かん」とてウオムスの會議に列り議員の前殊に當時全球土の半分を領し權威帝王の上に在る羅馬法王の前をも憚らず自ら信ずる所を確く取り吾妓に在り神

我を助けよとて只大能の神を信じ死を以て眞理を守りし勇氣は今古其儔を見ず靑史に垂れて千載に輝く所なり即ち今日歐州文明の本源ある基督敎は氏の力に依りて其本色を顯はし泰西の文明今日在るに至らしめし次第にして語を換へて申せば歐州の文明は氏の力に依りて芽を出せりと云ふべし殊に隱れたる眞理を發表し四百年後の吾等をして其理によりて立信の基を得て及ほして我同胞姉妹にも其理を擴張せんと思ひ立たしむに至りし氏の功績は實に偉大なる哉空前の事業にして又空後の事業ならんか此の事業を生み出せしマルチン、ルウテルが母は又幾何の功業を社會に與へしや設如一事の見るべくなく賞むべきなしとするも只マルチン、ルウテルを作り出しこれを敎育し以て彼の大業を奏せしめしを思へば吾等婦人の傳を綴らんには必ず先づマルチン、ルウテルが母の名を卷首に大書し其名を記せざるべからず何となれば女の事業にて子を育つ程大なる業はなく又其の大ひある子を作るより大功はあければ也。

●寄書

○花　井本　秀子

やまさくら色うすくともとふ人のこゝろは深くはなに染らむ
あたし風ふかなくもかな今しはし花のさかりを見よしのゝ山
何事もよそになかしてみつる哉すみたつゝみの花のさかりを

○文苑　鈴木弘恭大人撰

春月　古宇田淑子
さやかなる花の木のまにやとりても霞にくもる春のよのつき

同　石川呂久子
いにしへの人なつかしきはるの夜の霞のそでににほふ月かげ

川春月　高畠　延子
川そひのやなぎにやどる月影やもゆるけふりの霞むなるらん

月前花　跡見　鏡子
月と花と何れか宿のぬしと見むおとりまさりの無き夜也けり

同　秋元　潔子
花みんとこもれる山の櫻戸におぼろつき夜のかけもさしけり

同　松野　鏡子
月もまたあかれじとてや咲花の木のまにやとる春のよはかな

同　田邊　朝子
ともし火も春はうむけておぼろ夜の月と花とにむかはるゝ哉

同　後藤　花子
咲花に月さへにほふはるの夜はうとき人をもとふべかりけり

同　浦　早苗子
ささみちしはなの梢にかげとめて霞のそでににほふつきかな

同　三浦　常子
咲にほふ花の雲まをもれ出るつきもおぼろにかすむ夜半かな

同　原　やす子
見わたせば朧月夜のさくら花かぜのみかをるこゝちこそすれ

盛花　原田せい子
けふこずはかひなからまし散りもせず咲も殘らぬ山さくら花

落花　土屋　絲子
白雪をはなかとみしにひきかへて花を雪かと見るがをかしさ

同　太田すが子
時ならぬ雪を庭にも見つるかなさくらのこずゑ散り初しより

水邊落花　岡田　仲子
かねてより聞しにまさる玉川のきよきながれに散さくらかな

花交松　前島さく子
片山の松の木のまのしらくもはねださしかはすさくら也けり

蛙　跡見　節子
つはくらめ鳴ねもいとゝしめるなりみどりか岡の春雨のころ

同　平尾　竹子
深みどり柳の糸にたはむるゝつはめうはるのすがたなりけり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

燕

つばめすら花の盛をまたふらむこそのふる巢に歸りきにけり　片岡　君子

同

棚引けるかすみに深くとぢられて古巢たづぬるつばくらめ哉　松野　儀子

同

いく春もやどりわすれずつばくらめ簷が軒ばを音づれてけり　秋元　澤子

同

うつばりの塵をはらひてけふよりはあるじ顏にもすめる燕か　丹羽　花子

同

つばくらめおのが宿とや古宮の軒のやれまをつくろひにけり　武井　安子

同

春風になひくやなぎのいとまなくみだれて遊ぶつばくらめ哉　丸山　梅子

同

はるかせになびく柳のかたなりに燕のひなのこゑぞきこゆる　柘植　榮子

同

はる風になびく柳にならひつゝみだれても飛ぶつばくらめ哉　三橋　久子

同

此の春もあるじわすれずつばくらめ妻よびかはし歸きにけり　池田　孝子

同

春風になびく柳のいとかろくのきばにかよふつばくらめかな　新泉　傳子

水邊山吹

くれてゆく春のかたみの色見せて匂ふもあはれ山ぶきのはな　跡見　節子

同

いさら川きしの山吹さきしより下ゆくみづのなみもにほへり　三浦早苗子

同

我やどの池のやまぶき此のころは水のかげさへ花さかりなり　三條　富子

同

山吹の花のさかりとなりぬるをまちせかほなる池のかはづか　平尾　竹子

同

行く舟も心してさせ神なびのかはべにさけるやまぶきのはな　武井　保子

●新報

○時事新報と日本の女子

男女交際、舞踏論、洋服洋食の西洋風、悉く之を時事新報にすゝめられて行ひぬと云ふ日本の婦人多し而して今まや時事新報は追々と此等の事件に反對の語氣をあらはし段々と着實の樣子に近づく、宜しく之を其の近日の社說「日本之美術及び服裝」並に「女子教育の氣風」に於て證すべし。時事新報は輿論の先導にあらずして其の先觸なり、世人一般に洋服を好まんとすれば杜鵑一聲先づ時事新報の紙上に聞ゆ、世人又た洋服に反對せんとすれば電光一閃又た其紙上に現はる。吾人は時事新報の意見の段々と變化するを驚かずして輿論の追々と進化するに喜こぶ、ア、時事新報は是れ日本女風變遷の口狀書なるかな。

○女生徒の化粧

無くもがなと思ふは女生徒の厚化粧なり、洋服論、束髮論靴の論、凡て實用に入用の限り諸君は之に注意すべし其外は無用ならん。此頃田舍より出京したる一婦人云ふ、此樣では迚も娘を東京に出して留學はさせられぬと、先進の女學生宜しく注意すべし。

○大日本婦人教育會　去月廿一日帝國大學講義室に於て同會の第三回常集會を開き會員津田梅子（女子看護法心得）同水野粂子（女子獨立心なかるべからず）客員添田壽一（婦人の位置の高き原因）諸氏の演說あり來會者數百名なりしと。

○東京慈惠醫院　同院にては來九日に臨時總集會を開くこのとなるが當日は皇后陛下の行啓を仰ぐ由なり。

○日本音樂會　去月廿七日午後八時半より鹿鳴館に於て同會を開かれたり當日は誠に好天氣にて淑女紳士の來會するもの多く爲に樓上の二間も挾まきを覺へたり當日の曲目は都合十二にして最初に海軍々樂隊次に式部伶人東京音樂學校の教師チーチエ夫人の獨唱歌幸田遠山二令孃のバイオリン洋琴の合奏軍樂隊諸氏のカルメン唱歌劇中のファンタシー等なりしと同會に臨みし社友の話しなり。

○女子洋行　本鄉區東駒込片町十八番地高山紀一氏の二女しづ子（十七年）は學術修業のため三ヶ年間英國留學として去月廿九日出發せし由。

○小學女生徒の唱歌會　去月廿八日麴町、赤坂、四谷、麻布、四區の各公立小學校女生徒は青山練兵場にて唱歌會を催ふせし由。

○養育院慈善會　去月廿日より同廿四日まで晴天三日開設せし養育院慈善會の入場人員は五千七百二十六名にして賣得金高は凡そ四千圓にて各區の內最とも賣高の多きは第四區（呉服類）第七區（茶器、書畫類）なりしと云ふ。

○歌會　府下各雅會の每月會日と本月の兼題は花雨吟社（八日、郭公未遍）鍋氏（十三日、殘花）萩の舍（九日、首夏朝）河村女校（十一日、山餘花）服部氏（廿一日、雨後橘、夏河）竹栢園（十一日、橋邊船）蓬園（十八日、首夏風）松園二十日、松陰螢）翠園は每月不同にて本月は（十五日、夜卯花）柳園も不同にて本月は（廿六日、餘花稀）又花雨吟社にては競點題ありて其兼題は（海眺望）等なり。

○東京美術學校　同校は目下假に小石川なる植物園中へ設置しありて事務を取扱ひ居らるゝが追々事務も整頓濟に相成たるを以て近々上野公園地內の教育博物館中へ移轉せしめられ不取敢生徒二十名を養生する筈なりと云ふ。

○育女會　去月廿五日厚生館に於て午後三時より育女會春季大會を開かれたり來會者凡そ四百人最初會長石川よね子開會の主旨を述べ竹中成憲堀口昇外數氏の演說あり其間に公立常盤小學校生徒の唱歌あり全く散會ありしは六時半頃なりし同

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

會は學齢に後くれ又は餘暇なき婦人の爲に設けられしとのとなるが其演說を聞くに中には主義の論爭をさるゝあり諧謔をまじへ戯談かとも思はるゝとあり教育會としてはちと如何がしく感ぜられたり會衆の中には中年の婦人方も多く見受けたるがもし此會をして嚴粛の會となし實用的の事を熱心に講說教導せられなばかゝる婦人方には定めし有益なる事ならん(竹松子報)。

〇婦人養淑會　岡本斯文氏發起なる徳島の婦人養淑會幹事は岡本斯文氏伏見柳子前田政子日下仲子の四人なりと又同會は毎月第三土曜日に開會し講義談話及工業品を出すと云ふ。

〇久留米婦人協會　は追々入會者あり漸次隆盛に赴くに付會場を久留米築島町廿九番地に移し去一日より日々修身讀書作文數學英語唱歌音樂及必要の女工を研究するに決し毎月第一木曜第三日曜の兩度に常集會を開らき專ら女子必要の討論演說をなすと云ふ。

〇足柄婦人會　同會は昨年七月の創設にして隔月に開會し目下會員三十名あり幹事は中村、辻村、久保田の三令閨及小怒田令嬢の四人なりと同會は慈善主義を以て積金をなし居りしか先頃小田原火災の際其救恤費として義捐したりと云ふ。

〇和歌山女子高等小學校　にて去月七日區内各小學生徒の卒業證書授與式を行ひたり又和歌山婦人會員なる柏原紋子は同卒業生一同へ洋紙一ダース宛贈與せし由。

〇高田女學校　越後高田の有志者は今度同地四ノ辻通町に女學校を設け卒業期限を四年とし學科は修身讀書作文算術地理歷史理科圖畫英語唱歌裁縫編物家事經濟の諸科にて入學者は小學尋常科卒業者及相當の學力を有するものなりと云ふ。

〇松江婦人衞生會　島根縣松江にて石井きく、岡崎しま、田野やす、遠藤いと、錦織竹香等諸夫人の發起にて松江婦人衞生會なるものを設立せられ去る八日其第一會を松江病院養生室にて開きし由。

〇靜岡婦人交際會　同會は兼てより有志者の計畫ありて去月六日國手多々良梅庵氏宅にて其第一會を開かれ來會の婦人三十四名席上井上豐作多々良梅庵佐倉信武諸氏の說話あり頗る靜粛なる會なりしと。

〇藤岡婦人敎育會　去月十五日上州藤岡町金光寺にて藤岡婦人敎育會を開けり茶の湯、煎茶會式、毛糸編物、女禮等の練習をなし新井正章、磐井宗成、草香唯道諸氏の演說あり午前九時より午後四時に至つて散會せりと同會は佛教主義より成立したるものなれば他教を奉する婦人は一切入會を拒絶なし居る由又本五月の例會は第一日曜日即はち明日同町西蓮寺に開く都合なりと云ふ。

〇婦人會　遠州袋井宿の有志者は婦人矯風會なるものを設け先頃其の發會式を行はれしに頗る盛會なりしとのと。

〇三島女學校　駿州三島驛の北島某氏が所有の土藏を改造して一の女學校を設け一名の米國婦人を聘し英漢學裁縫唱歌を敎授する由。

〇婦人衞生支會　同會は今回千葉縣下へ支會を設置する由なるが同地には既に百餘人の有志婦人ありと云ふ。

〇博多幼稚園　博多保育所は去月廿五日より始業する筈なりしか諸般の設備存外に能く整ひ寧ろ進んで幼稚園となすべしとの議起り忽ち一決し更らに博多幼稚園と改稱せし由。

〇名張女學講談會　今度伊勢名張にて女學講談會なるものを創立し去月十九日其發會式を行ひたり同會は毎月二回宛開會の筈なりと云ふ。

〇高知英和女學校　仝校は去月廿三日入學試驗を執行し翌廿四日より開校せりと云ふ。

〇婦人會支部　信州上伊那郡坂下邊の有志婦人には松本婦人矯風會の支部を同地に設くる計畫中なりと。

〇彙報　私立三重女學校に於ては刺繡專修生五十名を募集せり〇庄村婦人會は去月廿一日其例會を開きたり〇高松の婦人談話會は去月十五日に其定期會を開きたり〇新潟師範學校にては女子部生徒に自炊せしむる由〇横須賀の婦人博愛會、矯風禁酒會は去月廿八日聯合懇親會を開きし由。

〇出版及版權書　去四月中官報にて廣告ありし出版及版權書目の中女學に關係のものを擧ぐれば左の如し。

出版

西洋女裝考	一冊	翻譯兼發行者	伊藤重固
		校正兼發行者	山成哲造
產科婦人科研究會演述摘錄	一冊	編輯兼發行者	松田堅道
月次句集	一冊	著作兼發行者	米澤勝次郎
月並三句合	一冊	編輯兼發行者	鈴木泰嶙
月並三句聚	一冊	仝	山内俊一
月並句集	一冊	著作兼發行者	曲直瀨道三
女子獨立演說筆記	一冊	發行者	福岡てる
初學染色法染料藥品之部		著作者	山岡次郎
		發行者	長谷部仲彦

版權

唱歌筆記稽古簿	一冊	大庭宗吉
米政新話烈女之動功	一冊	長井常
家政讀本	三冊	原亮三郎
樂器使用法	一冊	四竈訥治
新撰書學入門	自一卷至八卷	岡村增子

〇子供のはなし

小學校先生のお話　(賣こい仕立屋)

或る學校の先生數多の小供を招きて話されますには人に上下貴賤の區別あるは重もに智惠の大小によることにて殊に今日の時代とありては家柄と云ふものもなく只其人の智惠の力によりて大臣とも參議ともなれることで大に尊めらるゝも亦此の力によることであるされば智惠と申すものは世の中にて最も力強き者である或る西洋の田舍に至りて小さき一人の仕立屋がありました其身の小さく力の弱きゆへ常に人に輕ろしめられました之を遺恨に思ひ學問を心懸け居りましたに生來利巧者なれば其進みも早く中々村中に及ぶ者はなき程に至りましたなれど躰は尙小さく力は弱くありますから矢張人に輕しめられましたこれを餘り殘念に思ひ或日一瓶の酒を飲み盡しまして假寢をして居りましたに酒氣があるものですから澤山の蠅が群れ來り逐へば飛びて又來る五月蠅さに古着物を出して蠅に向ひ欲しくばこれをやらうと云ひながら前後左右に振り回しました斯くする中醉も覺めまして其坐を見ますれば最前振りし着物に觸れて仆れし蠅が此處彼處に一つゞつある數へ見れば七匹死んでありました仕立屋は暫し考へて居りましたが好き事思ひ付きしと見へニコ〳〵笑ひ大なる白き洋布の切を取り出しまして筆太に一擊七頭仆と書きて戶口に下げおきましたこれを見て村人は大きに驚き何如にして斯る力を得しやとこれより少しづゝ其人を尊ぶに至りました處で件の仕立屋はこれより全世界の人を驚してやらうと云ふゑらひ願を起しまして其明る朝少し牛乳を瓶に入れて隱袋の中へ入れ戶を出れば軒に小鳥が未だ眠りて居るこれも何かの用にもと同じく隱袋に入れて行きます程山深く入り込みました玆に大なる高坊主が居る件の仕立屋が一擊七頭仆と書きし旗を立てゝ行くものからアイツ小さき躰して一寸才など呼び留め何者ぞと尋ねしに仕立屋は腹太くも我こそは一たび擊ちて七頭を仆すと云ふ强者なれば天下を橫行して我が敵を求むるものなり爾意あれば我と共に來れと大平に申しました高坊主は大に怒りされば爾は此の石を搾りて水を出すの力ありやと尋ねられしかば仕立屋は其石を取り右の手にて握む間に左の手を隱袋の中に入れ一寸牛乳を指に濡しまして兩方の手で搾りましたに其石は濕りまして水をだしましたやうに見へました高坊主はコレはと驚きながら又一つの石を取り力を入れて投げやりました大變遠方まで上りましたが暫くすると又其所へ落ちました仕立屋はこれを見て上つた石の落つるは誰れでもすることと我が投げ上る石は天に昇りて鳥となり空中に上りて又落ち

來らずと云ひながら豫て石の如く丸めて持ちし鳥を投げ上げましたに鳥は放されて直ちに自由となり忽ち飛び去りました高坊主は實に力は強けれど二度まで此の小さき奴に負ましたものですから大變に殘念に思ひ幸に道に傍たる丈高き山桃の木の一番頂上の枝を取り撓め下まして申しますには君はこの木を持力は有るまじ來りて此山桃を食ひ玉へと申しました。此時仕立屋は術が盡き致し方もなけれど若しこれを持たざれば前の功も役には立づまじと一生懸命にて其枝を持ちましたあれど元來其躰は輕く其枝は強くありますものですからそれが爲め空中まで舞ひ上りましたが幸に無難に下りました高坊主はソレ見たり顔に御前はあの枝を支ふるの力がなかりしやと云ふ言葉も終らざるにイヤ一たび擊てば七頭を仆すと云ふ拙者にしてアレシキの事は何の事にも足らねど丁度當時向ふの林の獵人が銃を放ち其丸の足下に來るやう思ひたれば一寸飛び上りて避けたる次第であるが己には定めて彼れ位は飛び上らるゝ事と思ふいかにと問ひ返されて高坊主も負けぬ氣に飛び上りましたけれど中々小さき人が木にはねられて上る位飛び上ることはできません斯く三度とも高坊主が負ましたことでありますから高坊主も閉口して我家へ案内を致しまして

晩食を與へ寢床を與へました素より高坊主の寢床へ小さき人の寢ることとなれば不都合にて心地あしく且つは高坊主の復讐も如何にやと思ひましたゆへ寢床より下りまして室の隅に寢ました夜半頃になりましたに大な音が致しまして隣の壁が落ち其間より鐵の棒が丁度寢床の上に落ちました若し寢臺の上に寢て居りしなれば危かりしにと仕立屋は思ふとも知らず明る朝高坊主は思ふやう彼の奴は必定死せしならん氣遣なしと家を出で丶林をさして行く後より仕立屋はソロ〳〵と逐ひ行きまするを見たる高坊主は大きに驚き彼ころ實に不思議の奴と何所ともなく逃げ去りましたソコデ仕立屋は其家に藏め在る金錢を取り數日の糧を求めまして此度は或る國王の公園の人多き處に出でまして一擊七頭仆の旗を立て丶衆人の中を行きまするに人々は皆顧みて一つ擊たば七人も殺さるへとはサテ〳〵強ひ人かな若し戰もありたらんには定めて用に立つなるべしと國王に告げる者がありました國王は急ぎ其人を召して小さき人ゆへ僞ならんかと疑ひ申さるゝやう我國に二人の強盜あり常に山に在りて行人を艱ますも國中これに敵する人なしもし附これを平げなば其賞として我が娘と我王國の半を領たんと仕立屋は一たび擊てば七頭を仆す我力如何に力強きも僅か二人最と安き事なりと承知致しました。(未完)

(二十八)

廣告

宮内省御藏板

婦女鑑

全六冊

此書ハ宮内省ノ御藏板ニシテ婦人ノ亀鑑トナルベキ和漢洋ノ孝女烈婦貞女賢母等ノ言行事蹟ヲ蒐輯シ且ツ圖画ヲ挿入セラレシモノニテ既ニ本年一月

皇后宮ヨリ華族女學校ノ生徒ヘ御下賜相成リ實ニ婦人ノ課讀又ハ修身口授用書トシテ其德性ヲ涵養スルニ於テ最モ有益ノ書ナリ今般弊舗ニ於テ發賣ノ御許可ヲ蒙リ候ニ付婦人ハ勿論苟モ婦女教育ニ志アル諸彦ハ必讀アランヿヲ切望スル所ナリ

但シ右書ハ各賣捌ヘ差出シ有之候間何卒御手寄之書林ニテ御講求被下度候

東京書林

吉川半七恭白

定價金壹圓　郵送料金四拾錢

女學雜誌第九十七號に批評あり

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

○鈴木弘恭大人著述○小中村清矩大人評

改正增補 文法口授 全一冊●一名和文獨案内

定價十八錢 郵稅四錢

此書は文章家なる鈴木大人が多年諸學校の生徒に和作文を授業せられしを筆記したるものにて曩に出版したる所大に諸校の賞用を得たれば尚亦今般大人に乞ひ改正增補して古人の文章數十篇を巻尾に付し或は雅文を俗文に譯し或は漢文を和文に譯したる作例をも擧げたり然れば啻和文のみならず漢文を學ぶ人の和文を漢文に譯するにも大に益あるべし且女學校などに於て和文を學ばんとする生徒諸君の爲めには此に過たる良書なかるべし

●右文法口授は學校教科用の書籍に適當也とて發兌后一週日を經ざるに既てに成立學舍女子部跡見女學校頌榮女學校並に明治女學校長榮女塾等の教科書となりたり

○田口卯吉君結髮沿革附錄○和崎義路君校○巖本善治君跋
○渡邊鼎君著

束髮案内

美製小本八十頁細圖入 定價十五錢郵稅四錢也

當今束髮流行の折柄其結び方不案内の婦人少からず此書は日本婦人に適する束髮二十餘種の結び方を丁寧に教へ一々細圖を附して親切に案内すれば何如なる僻遠の地に在りて束髮の風を知らざる人々も之に依て容易に自ら試るを得べし特に田口卯吉君の論文束髮會の規則其外をも添へたれば結髮改良に志ある人々は宜く一讀あるべし

船越鼎太郎著

產婦小兒 攝生法

定價十八錢 郵稅四錢

巖本善治編

木村鐙子小傳

定價十錢 郵稅六錢

中島湘烟女史著

善惡の岐

定價金五拾錢 繪入美本

●目次○野蠻とも言へ未開とも言へ實に太平の聖なるべし○高島田にやの字の娘五分さかやきに無刀の浪士○紅潮端なく上る佳人の面○一樹の名花春動く初○谿間の清流も繁都の泥水なりしを知らずや○雙腕の勇餘す所なく滿腹の智遺す所なし○撫松庵のみ能く撫松庵の胸中を知れり○痴夢情烟春月暗○誰知一滴愛情水散湧奔波激浪來○世上の功名灰塵に異ならず○錢囊瘦腹裡飢以て天下の經濟を論ず○貧生の慷慨恃に足らず○當路の君子にして袖の下を嫌ふものはあらじ○双蝶花に戯れて春情あり○歡樂のある處悲愁の伏する處○姉妹の談濃かにして春窓の燭微かなり○怨もなく怒もなきは交りとぞ愛と共に新なるによる○撫松庵が胸邊寒く吹き送る巖間の風ぞ腥し○世難海より深かく人情紙よりも薄すし○會離緣あり應報爭ふべからず○優なる哉水聲人事の齷齪を嘲る○情人の艶話唯閑雲の聞くあるのみ○上帝親なく唯善人に與みす○客窓涙あり孝子の情○茲に因ありて茲に果あり○人間の歡樂一場の夢○墜葉翻つて力なく懶禽啼て恨あり○地下の白骨土いまだ冷かならず病窓の美人恨愈多し○開花原是落花風○人の死する其言ふとや善し。

●賣捌○本社、銀座博聞社、原金港堂

統計局次長世良太一君序○統計協會議員呉文聰君序
通今居士橫山雅男君著

婚姻論

定價金三十五錢 郵稅十四錢

此の書は通今居士橫山雅男君の著にして全編を二十八章に頒り總論。婚姻の定義。婚姻は人類の天性。婚姻の効力等より說き起し早婚。晩婚。私婚。血族婚。離婚。一夫一婦の正婚など悉く歐米の統計上より論及し議論正確文章平滑一讀我國舊來蠻風の結婚を改良すべきの必要を感ずるの書なり

發兌 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

東京婦人矯風會雜誌第壹號

明治二十一年四月十四日發兌

●論說　矯風會の目的(淺井柞)○自己の志想(佐々城豐壽)

●雜錄　君は喫烟するや(元良米)○萬國婦人基督敎徒矯風會頭マーガレット、ブライト、ルーカス女史の傳○酒の戒○格言○歌數首

●會報　米國婦人矯風會頭ウィラード孃の來翰○布哇駐在安藤領事へ出だせし書翰(一)高知縣會議員植木枝盛氏への書簡及其答書○其他會報數件

●寄書　雜誌の發行を祝して會員諸君に望む(竹尾忠男)○婦人說(岩上えん子)○東洋婦人の氣慨乏きを論す(奥野まつ子)

●雜報　岡山婦人禁酒會○其他四件

毎月第三土曜日發兌○一冊定價六錢半年分三十四錢一年分六十六錢郵稅一錢(府內無稅)

發行所　麴町區飯田町五丁目三十番地　東京婦人矯風會

齊家之秘訣 禁酒美談

全壹冊　定價金七錢 郵稅金四錢

人間眞正の幸福を奪ひ社會に害毒を流すもの未だ飲酒の惡弊より甚しきはなし心ある者常に慨歎憂慮して措かざる所也本書は歐米諸國に於て飲酒を禁じ或は家を興し或は名を揚げ惡漢は變じて良民となり惰夫は化して勤勉の士と爲りしが如き事實と飲酒より生ずる惡結果とを擧げて一讀其禍福利害のある所を知らしむるの良書也江湖の諸彦幸に購讀し玉はんとを

東京々橋區三十間堀二丁目二番地

發兌　江藤書店

鐵筆將軍著 明治之細君

定價金八十錢 郵稅金貳拾錢 クロース製極美本石版密書入

書籍の良否は世間自ら公評あり故に本書は流行の奴隸となり賣藥の效能書然たる過賛を喋々せず然れども其果して世間流布の二三十錢の安物と其價値を同ふするか其文章は何如其意匠は何如其用紙印刷插畫製本等は何如請ふ江湖の諸君御購讀の上此等の諸問題を解せられよ

東京本鄉元富士町二番地

盛春堂發兌

簿記銀行科專門

本校今般一層ノ擴張ヲ計ン爲各專門敎師ヲ聘シ通信敎授ヲナス經濟上金錢其他ノ出納ヲ一目瞭然ナラシメント欲スルニハ簿記學ノ緊要ナルコ諸士ノ克ク知ル所ナリ簿記ニ數種類有ト雖モ一朝銀行簿記ヲ脩ムル時ハ他種ノ簿記ヲ脩ムル敢テ難キヲ覺ヘザルベシ他種ノ簿記ヲ脩メ銀行簿記ニ入ント欲スレハ大ニ其難ヲ感ス依テ銀行簿記講義錄毎月三回發兌無遞送料今回第六期通信生徒募集ス

募集廣告

東京神田猿樂町一丁目　私立速進學校

速記科專門

抑モ演說討論裁判講義講談會議等ノ言論ノ盛ンナル現世ニ於テ速記法ノ必要ナルコハ能ク人ノ知所ニシテ贅言ヲ要セザレモ是ヲ筆記スルノ法ヲ知ラズンハ何ノ益カ之レアラン既ニ這回發令ノ市町村制ノ如キ專ラ會議ノ擧ノミナリ其會議ノ言論ヲ直寫シ世ニ裨益スルハ即チ此速記法也今回第四期通信生徒募集ス

○簿記脩業期四ヶ月筆記三ヶ月謝金一科ニ付七十錢前納其他何費ヲモ要セスト雖モ質問ノ際郵券二錢ヲ投セヨ速記法脩業者ニハ筆記法獨習敎授書全一冊贈與ヲ乍併謝金送達ノ上ナラデバ送本セズ

○學期ニ至レバ試驗ヲナシ卒業證ヲ附與ス實際筆記ヲ爲シ得ルモノハ官省其他ノ筆記者ニ紹介ス

○送金ノ節ハ郵便爲替振込局は神田郵便局申込ハ來二十一年五月十日限リトス

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

●結婚媒妁所

東京日本橋區檜物町一番地○全國何人に限らず嫁聟媒妁依頼に應ず

花の廣告

當園の躑躅花の眞盛り諸君來て縱覽あれ

南豐島郡大久保百人町

躑躅園幹事

今般四月廿七日より上花牡丹弁に諸盆栽陳列仕候間多年の苦心栽培に因り本年は一層珍らしき花樹有之候に付き無料にて諸君の御遊覽に供し候間御光臨を請ふ○賣買隨意

駒込藪下

清水藤吉

汐溫泉廣告

富岳眺望宜しき地へ手廣に一字相ひ建て傍に和琴月琴一絃三味線等を置き御滯在のおなぐさみに供ふ且つ庭上より一歩にして海邊に至り海水浴には便利に候間何卒御來車被下度奉願候也

但し

金四十錢より二十錢　御晝食料

金七十五錢より三十錢　御宿料

御滯在上等三十錢下等二十錢其外思召に應し上下御賄御手輕に勉强仕候也

江ノ島

岩本樓

發兌				
四月。	七日	十四日	廿一日	廿八日
五月。	五日	十二日	十九日	廿六日
六月。	二日	九日	十六日	廿三日　三十日
七月。	七日	十四日	廿一日	廿八日

定價		
一册。五錢	郵税。一錢	（但府内無郵税）
十册。四十八錢	郵税。十錢	（同前）
半年分	一圓十七錢	府外は　一圓四十三錢
一年分	二圓卅四錢	府外は　二圓八十六錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁以上半頁分毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

一行　一回　前金拾錢　（廿七字詰）

同　三回以上　一割引

同　六回以上　二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町駸々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町眞明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷町四丁目文春堂○横濱住吉町角田晃貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボードー○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彥根西内大工町新町々堂○相州小田原綠町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十一年五月三日印刷

明治二十一年五月五日出版

發行所　東京京橋區日吉町八番地

女學雜誌社

編輯兼發行人　東京京橋區日吉町八番地寄留

嚴本善治

印刷　東京下谷區仲徒町三丁目七十一番地

森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.

Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.